人間と自然資源 第6回

日本型グリーンインフラを目指して「野川」

湧水と歴史がつなぐ水と人

古田尚也 ―IUCN日本リエゾンオフィスコーディネーター

国分寺崖線沿いに連なる湧水と歴史遺産をつなぎ、国分寺から二子玉川まで流れる野川。野川は今、水の流れを基軸にし、歴史と自然、人と人を結びつけるグリーンインフラとしてさらに進化しようとしている。

撮影●古田尚也　協力●水系デザイン／法政大学　神谷博

上／現在の国分寺。武蔵国分寺跡のすぐ北側にある。下／真姿の池湧水群は、武蔵国分寺立地の根拠になったともいわれている。

古来から、人が住み続けてきた一等地

野川は東京を流れる多摩川の支流で、全長約20㎞弱の小さな川である。国分寺市の日立製作所中央研究所内に源を発し、小金井、府中、三鷹、調布、狛江の各市、世田谷区を流れ、二子玉川で多摩川に合流する。

野川は国分寺崖線とほぼ平行に流れているのが一つの特徴だ。国分寺崖線とは、立川市から大田区まで連なる総延長約25㎞、高さ10―20mの崖や斜面のことで、多摩川が長い年月をかけて武蔵野台地を削って形成した河岸段丘である。

野川の流れは、この国分寺崖線から湧き出る多数の湧水によって形作られている。また、こうした多くの湧水が存在することから、古墳時代からの遺跡や神社仏閣などの文化・歴史遺産が野川沿いには数多く点在している。

国分寺崖線と人々とのかかわりの歴史は深く、飛鳥時代には、多摩川の水利等の理由から府中に国府がおかれ、奈良時代には、武蔵国の国分寺や国分尼寺が設けられた。国分寺では、旧石器時代の遺跡も発掘されている。このように、野川流域は、古来より人々が住み続けてきた一等地だった。

上／「史跡の駅ーおたカフェ」は、国分寺市が東京経済大学・国分寺地域連絡推進協議会に委託し、史跡地域の総合案内等を行う施設である。カレーや喫茶などのメニューもある。左下／史跡公園として整備が進む武蔵国分寺跡。右下／真姿の池からつながる水路。遊歩道として整備されている

都立武蔵野公園と都立野川公園が連続するエリアは、野川で最も緑の河川空間に恵まれた場所だ。

歴史や自然をつなぐ水のみち

現在、野川流域では国分寺から世田谷に至るまで、歴史や自然を生かした多様なまちづくりが進められている。源流の国分寺市では、国の史跡である武蔵国分寺跡や国分尼寺跡を中心とした史跡公園整備が進められている。また、国分寺跡のすぐ北側には現在の国分寺があり、その境内には万葉集に出てくる植物を集めた「万葉植物園」が整備され、人気を博している。

これらの史跡の近くには全国名水百選にも選ばれた「真姿（ますがた）の池湧水群」がある。真姿の池湧水群は、武蔵国分寺の立地の根拠になったともいわれており、真姿の池湧水群から流れ出た水は、小さな水路となって野川に注ぐ。この水路沿いの道は「お鷹（たか）の道」と名付けられ遊歩道として整備されている。「お鷹の道」という名前は、この地域が、江戸時代に尾張徳川家の御鷹場に指定されていたことにちなんでつけられたものだ。お鷹の道近くには、武蔵国分寺跡資料館や史跡地域の総合案内等を行う施設である「史跡の駅－おたカフェ」なども整備され、市民や訪れる人々の憩いの場となっている。

野川を少し下り、小金井地区に入ると、都立武蔵野公園と都立野川公園が連続する野川で最も緑の河川空間に恵まれたエリアに出る。このエリアは湧水量も多く、生き物も豊かだ。武蔵野公園には洪水を防ぐための調節池があり、東京都内では唯一の自然再生事業が行われている。

都立武蔵野公園では、都内で唯一の自然再生事業が行われている。

野川をさらに下り、調布地区に入ると深大寺のエリアに入る。深大寺の創建は733年（天平5）と武蔵国分寺より古く、都内では浅草寺に次ぐ2番目に古い歴史を有している。深大寺も野川流域では代表的な湧水地となっており、多くの湧水ポイントがある。中でも、深大寺開創の由来である深沙大王（じんじゃだいおう）がまつられているお堂の後ろにある湧水は、一番古いものだといわれている。深大寺界隈は蕎麦の名所としても有名であるが、深大寺用水からの落差を利用して水車が作られ、その水車で粉を挽いて深大寺蕎麦が作られ、名所になったという説もある。また、深大寺の北側には都立神代植物公園が一大緑地として残されている。

野川をさらに下ると世田谷の成城地区に入る。成城地区では、「成城みつ池緑地」が地域の核となって存在している。「成城みつ池緑地」は、東京23区内で唯一のゲンジボタルや、その他の絶滅危惧種に指定されている動植物の貴重な生息地となっている。1978年（昭和53年）にその一部が「成城みつ池緑地保全地区」に指定され、さらに世田谷区からも「特別保護区」に指定され、現在は、地元の市民団体によってサンクチュアリーとして管理されている。

みつ池は、面積わずか2・9haの緑地であるが、標高差20mの斜面地の一部が小さな渓谷となっていて、その奥からこんこんと清水

上／深大寺も野川流域で湧水が数多くあるスポットだ。深大寺の創建は733年と武蔵国分寺より古く、都内では浅草寺に次ぐ2番目に古い歴史を有している。左下／深大寺界隈には、名物として有名な深大寺蕎麦の店が数多く点在する。右下／深大寺開創の由来である深沙大王（じんじゃだいおう）がまつられているお堂。この後ろにある湧水は、一番古いものだといわれている。

上／世田谷区の成城みつ池から野川へと流れる水路。中／みつ池は、都内唯一のゲンジボタル生息地。餌となるカワニナがたくさん生息している。下／みつ池の名の通り、湧き出た水が林の中で池を作っている。

が湧き、林の中を静かに流れている。古くからこうした湧水や谷地が荒らされることを恐れた地元の農民は、ここに水神様の祠を造り祀ってきた。この神社は深大寺より、さらに歴史が古いとされている。

成城地区では、このほかにも小田急線の車庫の上の利用権を世田谷区が譲り受け整備した公園や、人工的な護岸をうまく隠し整備した野川の自然など、質の異なる自然が層を形成し、多様な生き物のすみかを形作っている。

二子玉川は、野川の終着点だ。

野川はここで多摩川と合流し、その役割を終える。二子玉川では、最近オープンした二子玉川ライズや玉川高島屋などの商業施設で屋上庭園が整備されている。こうした緑地も、野川流域に連なる一連の緑の一部と考えることができるかもしれない。

野川を守ることは湧水を守ること

このように、東京の都市部に残された貴重な自然空間として現在多くの市民に愛される存在となっている野川であるが、1970年代には非常に汚染が進み、悪臭を放つ汚れた川であったという。実際、当時の野川は多摩川の主要汚染源の一つになっており、このために、二子玉川の合流地点付近にある玉川上水場が取水停止に追い込まれることすらあった。

「二子玉川は江戸時代アユの料亭で有名なところでした。どうすれば野川を清流に戻せるのか。野川の汚れをよく見ると明け方には清流に戻ることがわかりました。つまり、湧水を守り下水道が普及すればいつかは野川のアユが戻るのではないか。そうした希望を持って野川の湧水保全運動が始まったのです」と、現在野川流域連絡会の座長を務める建築家・法政大学兼任講師の神谷博さんは当時を振り返る。

神谷さんは、法政大学の学生だった頃から40年にわたって野川にかかわってきた。野川には、源流近くの真姿の池湧水群を始め、深大寺の湧水群、成城みつ池の湧水など、神谷さんが調査を始めた40年前には72カ所の湧水が確認されていた。しかし、その後10年の間にこれら湧水地点の3分の1が枯渇もしくは消滅したのだという。戦後のスプロールによる市街化がその主たる原因であった。

当時は開発最優先の時代であり、貴重な湧水地といえども次々と危機にさらされ、湧水を守ることは簡単ではなかった。しかし、そのたびに住民や市民の反対運動が起き、実際、いくつかの湧水地はこうした活動の結果守られ、現在では公園として整備されている。真姿の池湧水群の涵養域に位置する都立武蔵国分寺公園もそうした例の一つだという。

「今、野川流域に緑が残っているのは決して偶然ではないのです。保全の歴史の結果としてこうした緑が残されているのです」と神谷さん。湧水を守るためには、水が湧き出ているその場所だけではなく、湧水につながる地下水に水を供給している涵養域全体で水が地下に浸透する機能を守っていかなければならない。武蔵国分寺公園を始め、武蔵野公園や野川公園、神代植物公園など、野川流域には涵養域に大規模な緑地が公園として数多く残されている。

これに加え、野川流域では市民が主体となって、湧水を保全するために雨水を地下に浸透させ、地下水を涵養する取り組みが長年にわたり行われてきた。こうした運動の先駆けとなった小金井市では、1980年代の初めから住民の自主的な動きとして各家庭への雨水浸透ます等の設置が始まった。現在では、小金井市の雨水浸透ます設置率は50%を超えている。

小金井市だけでなく、みつ池のある成城地区でも20年以上前から雨水浸透ますや雨水タンクを民家に設置する活動が地道に行われてきた。ここでも、協力する住民の動機は湧水の保全だ。市民団体みずからが、既存の住宅一軒一軒を回り設置を働きかけてきた結果、現在では成城地区の約半数の家で雨水貯留や浸透の施設が設置されているのだという。

日本型グリーンインフラを目指して

このように市民の力によって長年活動が行われてきた野川で今、国土形成計画や社会資本整備重点計画に盛り込まれた「グリーンインフラ」の考え方が脚光を集めている。グリーンインフラとは、人工構造物（グレーインフラ）だけに頼るのではなく、自然の力や機能をうまく組み合わせてインフラの一部として活用していこうという考え方である。昨年、グリーンインフラに関するシンポジウムが世田谷の市民主催で、すでに2回開催された。自然再生や防災、雨水の取り組みなど、これまで野川で進めてきた取り組みを融合させ、さらに一歩進めるために、「グリーンインフラ」の考え方を生かそうとしている。

「野川でのグリーンインフラの一つの鍵を握るのは、歴史や文化の要素です。これらの要素をうまく組み込んでいくことで日本型のグリーンインフラのモデルを作れるのではないかと考えています」と神谷さん。

野川は今、水の流れを基軸にし、歴史と自然、人と人を結びつけるグリーンインフラとして、さらなる進化を遂げようとしている。

野川は、二子玉川で多摩川に合流する。

野川流域連絡会座長の神谷博さん（右）と取り組む市民の方々

Naoya Furuta

大正大学地域構想研究所教授。
東京大学大学院農学生命科学研究科
博士課程単位取得退学。
三菱総合研究所を経て、2009年より
IUCN（国際自然保護連合）の
日本オフィスにおいて生物多様性に関する
国内外の政策展開に従事する。